

氏 名 永井 詩穂

学 位 の 種 類 博士 (医学)

学 位 記 番 号 博士第996号

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第1項

学 位 授 与 年 月 日 令和6年3月21日

学 位 論 文 題 目 HIV/AIDS knowledge level, awareness of public health centers and related factors: a cross-sectional study among Brazilians in Japan  
(HIV/AIDS の知識レベル、保健所の認識と、それらの関連要因:在日ブラジル人における横断的研究)

審 査 委 員 主査 教授 三浦 克之  
副査 教授 向所 賢一  
副査 教授 伊藤 俊之

## 論文内容要旨

※整理番号	1005	(ふりがな) 氏名	ながい しほ 永井 詩穂
博士論文題目	<p>“HIV/AIDS knowledge level, awareness of public health centers and related factors: A cross-sectional study among Brazilians in Japan” (HIV/AIDSの知識レベル、保健所の認識と、それらの関連要因：在日ブラジル人における横断的研究)</p>		
<p><b>【目的】</b> 世界のHIVとともに生きる人々の推定人数は、2022年には3,900万人に増加し、130万人が新たにHIVに感染し、2022年には合計63万人がエイズ関連の疾患で死亡したと報告される。HIV検査や診断が遅れるリスクが高いとされる移民と同様、日本に住む外国人もHIV/AIDS治療に到達するには障壁があるものと考えられる。本研究の目的は、在日外国人におけるHIV/AIDSに関する知識レベル及び日本の保健所の認知度を評価し、これらの項目に関連する要因を明らかにすることである。</p> <p><b>【方法】</b> 在滋賀県外国人の中で最多のブラジル人を対象に、住民基本台帳に登録された18～79歳の母集団7539人に対し、366人から回答を得ることを目標とした。調査法はポルトガル語と日本語を併記した無記名自記式質問紙調査で、Web調査法と郵送法を併用した。周知の方法は、滋賀県国際協会、市役所の通訳相談員らを通じてSNSや情報紙で広報し、在滋賀県ブラジル人の集住地域(学校・教会・事業所等含む)の28か所を訪問し各協力拠点で質問紙のチラシと質問紙を配布した。調査期間は2021年4月から1年間である。質問項目は、年齢、性別、セクシュアリティ、職業、日本語の会話・読解力、主要生活言語、HIV/AIDSの知識、日本におけるエイズ診療体制の知識などである。日本語力については、回答者が自己評価した日本語の会話・読解力(各5段階評価)に基づいて、上級・中級・初級の3群に再分類した。多重ロジスティック回帰分析を用いて「HIV/AIDSの知識」と「保健所の認知度」に関連する要因を検討した(有意水準5%)。</p> <p><b>【結果】</b> 全回答者182人が日常生活で使用している言語はポルトガル語で、半数以上が日本語力初級者だった。70～89%の回答者がHIV/AIDSの知識を有していたが、保健所を知っていたのは58%、保健所でHIV検査が無料かつ匿名で受けられることを知っていたのは25%であった。多重ロジスティック回帰分析の結果、HIV/AIDSに関する知識レベルは、女性よりも男性の方が低く(OR: 3.05, 95%CI: 1.46-6.37)、有職者よりも無職者の方が低かった(OR: 6.41, 95%CI: 2.27-18.13)。保健所の認知度は、日本語力中級者(OR: 5.70, 95%CI: 1.53-21.23)および初級者(OR: 6.81, 95%CI: 1.98-23.45)では上級者よりも、独居の人(OR: 3.93, 95%CI: 1.07-14.46)では同居者がいる人よりも、それぞれ低かった。</p>			

- (備考) 1. 論文内容要旨は、研究の目的・方法・結果・考察・結論の順に記載し、  
2千字程度でタイプ等で印字すること。  
2. ※印の欄には記入しないこと。

(続 紙)

**【考察】**

本調査でHIV/AIDSの知識レベルに男女差を認めたのは、女性はHIVの母子感染を防ぐため妊娠中にHIV検査をすることが、ブラジルでも日本でも勧められているため知識を得やすかったと考えられる。また、現在、滋賀県が提供するHIV検査に関する情報は、日本語では詳細であるが、ポルトガル語では限定的なため、日本語力初級・中級者は保健所の知識を得にくかったと考えられる。

医療にアクセスするためのプロセスは、医療ニーズの発生、医療のニーズの認識と欲求、医療ケアを探す、サービスにたどり着く、医療ケアを利用する、転帰の6つに分けられる (Levesque et al. 2013)。サービス利用者が医療ケアを獲得することを実現するために、サービス提供者は「アプローチのしやすさ」、「受容性」、「利用可能性と収容力」、「手頃な価格」、「妥当性」の5つの基準を満たすことが求められる。またサービス利用者は各段階で、認識力、探し求める力、たどり着く力、支払い能力、治療への参加を求められる。そこで、サービス利用者を滋賀在住のブラジル人に、サービス提供者を保健所に置き換えて、どの段階で彼らが保健所にたどり着けないかを検証した。無料・匿名のHIV検査やアウトリーチ活動に関する情報発信の不足により、保健所への「アプローチのしやすさ」が阻害されている。保健所が外国人を受け入れるのか、保健所にポルトガル語の医療通訳者がいるのか、来訪者のプライバシーの保護が十分確保されているのかが不明で、「受容性」が阻害されている。また、滋賀県内の7ヶ所全部の保健所でHIV検査(予約制)ができるが、平日の限られた曜日と少しの時間しか検査を受けられないため、非正規雇用が多く仕事を休みにくい環境にある滋賀県在住外国人にとっては「利用可能性と収容力」が阻害されている。HIV/AIDSに関する知識があり、HIV検査を受けたいとサービス利用者が判断できたとしても、「アプローチのしやすさ」、「受容性」、「利用可能性と収容力」という3つの側面で、彼らが知識に基づいて行動することが妨げられ、保健所へのアクセスを困難にしていると考えられた。保健所の認知度を高めるには、文化的背景と民族的多様性を考慮し、日本語力初級から中級レベルの人を対象とした簡単な語彙と文法を使った表現形式の「やさしい日本語」とポルトガル語で情報発信する必要があると考える。

**【結論】**

本調査に回答した在滋賀県ブラジル人はHIV/AIDSに関する知識を有していたが、保健所の認知度は低かった。HIV/AIDSの知識レベルには、性別と職業の有無が、保健所の認知度には同居人の有無と日本語力が関与していることが明らかになった。

## 博士論文審査の結果の要旨

整理番号	1005	氏名	永井 詩穂
論文審査委員	主査	三浦 克之	
	副査	向所 賢一	
	副査	伊藤 俊之	
<p>(博士論文審査の結果の要旨)</p> <p>本論文では、在日ブラジル人におけるHIV/AIDSの知識レベル、保健所の認識の程度とその関連要因を明らかにすることを目的として、滋賀県在住ブラジル人182人を対象とした調査を実施し、データ解析を実施した。ウェブおよび郵送にて県内28カ所を訪問して調査を行い、HIV/AIDSの知識、保健所の認知度に関連する要因について多重ロジスティック回帰分析で検討し、以下の点を明らかにした。</p> <p>1) 70-89%の回答者がHIV/AIDSの知識を有していたが、保健所を知っていたのは58%、保健所での無料検査を知っていたのは25%であった。</p> <p>2) HIV/AIDSの知識レベルは、女性より男性で低く、有職者より無職者で低かった。</p> <p>3) 保健所の認知度は、日本語力上級者より日本語力中級者で低く、同居者がいる人より独居の人で低かった。</p> <p>本論文は、在日ブラジル人におけるHIV/AIDSの知識普及の課題について新たな知見を与えたものであり、また最終試験として論文内容に関連した試問を実施したところ合格と判断されたので、博士(医学)の学位論文に値するものと認められた。</p> <p style="text-align: right;">(総字数468字)</p> <p style="text-align: right;">(2024年2月19日)</p>			